

あとがき

猪名川流域について調べてみると、現在の新興住宅地という顔とは別に、源氏発祥の地多田神社や呉服の里をはじめとする深い歴史と豊かな文化に育まれた地域であることを改めて感じさせられた。京都や奈良など都以外の地域にも川を中心とした生活や豊かな文化が営々として築かれてきたことをかいまみる機会ともなった。また、平成23年1月22日、一庫ダムの見学を実施した折、一庫ダム管理所（独立行政法人水資源機構）の青井保男所長には、「ダムの水質への取り組み」に係る講義を受け、貴重なダムの実情についてお話を伺った。ここにお礼申し上げます。

（公社）日本水環境学会関西支部川部会 服部 幸和・奥野 年秀・高原 信幸

参考文献

- ・川西市史編集室編(1981), 川西史話, 378pp.
- ・川端道春(1977)宝塚の風土記, 川瀬書店, 302pp.
- ・多田銀山史跡保存顕彰会(2009)黄金伝説の郷・多田銀山・史跡と伝説(改訂版), 86pp.
- ・中元十三(2008)猪名川町銀山今昔, 232pp.
- ・福本賀弘(1989)清和源氏発祥の地 かわにしの歴史を語る, 東洋出版, 245pp.
- ・柚木 学(1988)日本の技術 日本酒, 第一法規出版株式会社, 143pp.
- ・国土交通省水管理・国土保全局HP, 日本の川.
- http://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/index.html
- ・尼崎市立地域研究史料館HP, 図説 尼崎の歴史-古代編- Web版.
- <http://www.archives.city.amagasaki.hyogo.jp/chronicles/visual/index.html>
- ・大阪府立中之島図書館HP, おおさかページ〜大阪資料と古典籍〜近世の大阪の酒.
- http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/23_sake.html

既刊の紹介

- ・みやびな川 編 『白川』(2010)『鴨川・明神川』(2012)
- ・歴史とロマンの川 編 『瀬田川・宇治川』(2010)『保津川・桂川』・『芥川』(2011)
- ・源流を行く 編 『名張川』(2013)
- ・なにわの川・庶民の川 編 『東横堀川・道頓堀川』(2011)『恩智川・生駒の川』(2012)

（財）琵琶湖・淀川水質保全機構
〈企画編集〉（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（社）近畿建設協会

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～ 〈歴史とロマンの川 編〉

猪名川 (Inagawa)

〔発行〕平成25年3月
〔発行者〕財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15 (大手前センタービル4F)
TEL. 06(6920)3035 FAX. 06(6920)3036
〈ホームページ〉 <http://www.byq.or.jp/>
* 散策ブックはホームページ上で閲覧することができます *
©BYQ, 2013 Printed in Japan

「 飲める水 遊べる水辺 次世代に 」

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる ～ちょっと大人の散策ブック～

歴史とロマンの川 編

猪名川

(Inagawa)

（財）琵琶湖・淀川水質保全機構
（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（社）近畿建設協会



「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構と(公社)日本水環境学会関西支部川部会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは「歴史とロマンの川」編として、大阪・兵庫両府県を南下して流れる猪名川を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

目次

ねらい・目次

猪名川の概要	02
猪名川上流部西部ゾーン	03
猪名川上流部東部ゾーン	05
コラム1 知明湖・一庫ダム	05
コラム2 猪名川と多田神社	08
猪名川中・下流部	09
コラム3 猪名川伏流水と酒造り（池田酒と伊丹酒）	11
コラム4 猪名川の水質	13

CONTENTS

(表紙写真／呉服橋から猪名川を見る)

1 猪名川の概要

猪名川は、淀川水系の内、最も西側を流れて神崎川に合流する河川である。兵庫県川辺郡猪名川町の大野山を水源地として、大阪・兵庫の両府県を南下して流れ、河口から約6.5km上流で神崎川右岸に合流している。流域面積383km²、幹線流路延長43.2km、流入42支川の1級河川である。猪名川の名称の由来は、住吉大社神代記によれば、大昔、川のほとりに住んでいた山直阿我奈賀という者が、その川を阿我奈川と名付け、それがなまって為奈川となったと言われている。

猪名川流域は、上流部に猪名川町(兵庫県)、能勢町、豊能町(大阪府)などの山間地域があり、中流部は、川西市(兵庫県)、池田市、箕面市(大阪府)などの市街化進行地域がある。住宅団地やゴルフ場などの開発が急激に進んでおり、それに対応して一庫ダムなどにより豪雨の際の洪水対策が進められている。これら上中流部には、数々の歴史とロマンの香り高い社寺や遺跡が多くみられる。下流部には、豊中市(大阪府)及び尼崎市、伊丹市(兵庫県)などの既成市街地があり、伊丹空港など東西の拠点を結ぶ交通機関が集中し、大小約6,000の工場が立地している典型的な都市河川となっている。それでは、散策に出かけてみよう。



猪名川流域図

2 猪名川上流部西部ゾーン

猪名川上流部の探索の起点を阪急川西能勢口駅あるいはJR川西池田駅にとる。猪名川沿い県道12号線を北上すると川辺郡猪名川町北端の^{おお}大^{やさん}野山の麓に猪名川の源流があるといわれている。付近に**奥猪名健康の郷**がある。大野山は標高753m、北摂連山の最高峰である。峠を越すと、かつて有馬温泉と並び称された^{かこのぼう}竈坊温泉がある。

猪名川は、源流からクヌギやナラの林に囲まれた山間を縫って流れ、ところどころに小さな盆地があり、小さな集落をつくっている。杉生の**八坂神社**はそんな集落の鎮守の森の1つであり、県文化財指定の本殿がある。杉生より猪名川渓谷を



奥猪名健康の郷



八坂神社



猪名川ふるさと館



猪名川親水護岸



屏風岩



東光寺



代官所跡



銀山橋



高札場跡



代官所の門



金山彦神社



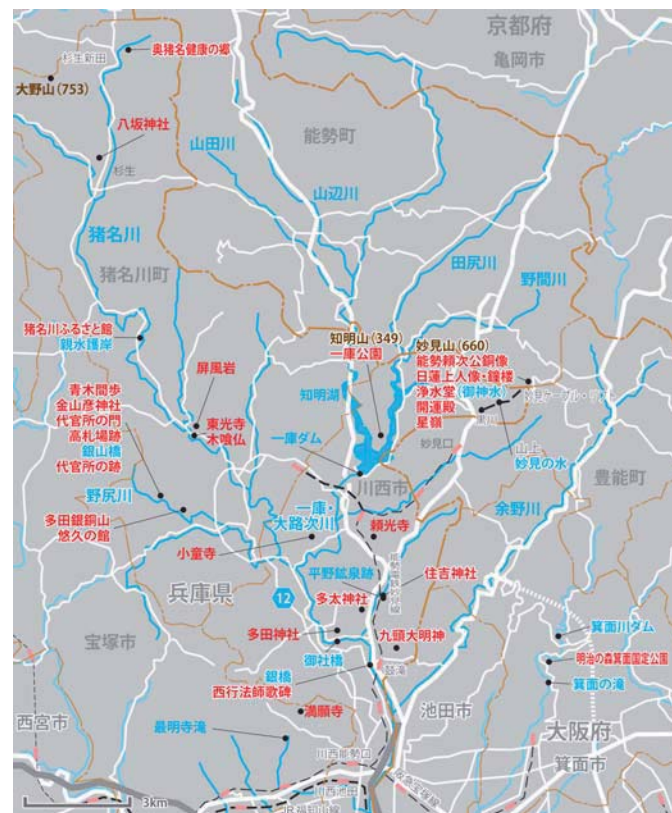
青木間歩

下ると**猪名川ふるさと館**があり、その裏手には**親水護岸**がある。ここからしばらく下ると景勝**屏風岩**が見える。やや南に大江山の鬼退治に出かける源頼光が祈願したといわれる**東光寺**がある。江戸時代に訪れた木喰上人が彫って納めたといわれる**木喰仏**がある。

ここより少し下って、12号線の広根大水口の交差点を西に行くと、**猪名川町立多田銀銅山悠久の館**がある。この銀銅山は2000(平成12)年から猪名川町教育委員会により発掘調査が開始された。**多田銀銅山**は、北摂地域に広がる鉱山で、古く奈良時代の東大寺大仏建立の際に、採掘された銅が使用されたと伝えられ、豊臣政権時代には直轄鉱山となり栄えた。猪名川支流の**野尻川**に沿って遡っていくと、江戸時代に設置された**代官所の跡**、**銀山橋**、**高札場跡**、移築されたとされる**代官所の門**がある。

少し行くと807(大同2)年に建立され、971年源満仲により修理されたとの伝承がある**金山彦神社**があり、江戸時代に採掘されたとされる**青木間歩**がある。間歩とは、鉱石を採掘するために掘った坑道で、ここでは唯一坑道内を体験できる。

少し遡っていくと、秀吉ゆかりの**瓢箪間歩**、**台所間歩**があり、昭和に入ってから、日本鉱業(株)により大規模な採掘が行われ、1973(昭和48)年に閉山となっている。銀銅山の語り部の中元十三氏(故人)によると多くの銀山昔話があり、代官所にまつわる今昔物語は大いに興味をそそる。



3 猪名川上流部東部ゾーン

次に、猪名川本流の左岸側に目を向けてみる。
山辺川、**山田川**、^{ひとくろ おおるじがわ}**一庫・大路次川**、**田尻川**、**野間川**などの多くの支流がある。山辺川や一庫・大路次川の上流部は、春の小川を連想させるような里川であり、田尻川にはカワニナがみられ、ホタルの生息を予想させる清流である。これらの支流は、この地域の水不足解消や治水のための多目的ダムとして造られた**知明湖・一庫ダム**(コラム1)を介して猪名川に流れ込んでいる。知明湖の中央に突き出た**知明山**(349m)には、水辺、丘、山の3つのゾーンからなる**一庫公園**が整備されている。

知明湖の北東の知明湖国崎せせらぎ地区を黒川沿いに遡ると妙見ケーブル黒川駅があり、山上駅でリフトに乗り換えると**妙見山**(660m)に着く。山



山辺川(左)と一庫・大路次川(右)



カワニナがいる田尻川渓流



妙見の水

コラム 1 知明湖・一庫ダム

知明湖・一庫ダムは、兵庫県川西市の淀川水系猪名川支川一庫・大路次川の下流部にあり、周辺は都市化が進む典型的な都市ダムである。洪水調節、水道用水の供給、取水の安定化および環境保全のための流水の確保のため、1982(昭和57)年に完成し、水資源機構により管理されている。堤高75m、堤頂長285m、堤体積44.1万m³、総貯水容量3,330万m³、有効貯水容量3,080万m³の重力式コンクリートダムである。一庫ダムは、100年に1回程度の頻度で起こる大雨に対応して建設されたが、過去の洪水被害を踏まえて、現在では20年に一度の頻度で起こる中小洪水を対象にして洪水調整が行われている。

ダムの水は、兵庫県の尼崎市、西宮市、伊丹市、宝塚市、川西市、猪名川町の5市1町と、大阪府の池田市、豊能町など、約60万人

分の水道用水として利用されている。その他、猪名川流域の農地に対する灌漑用水等の補給、流水の正常な機能の維持、ダム周辺の環境の保全に取り組まれている。

知明湖の名は知明山にちなんで伊藤龍太郎川西市長により命名された。知明山は、銀銅を産出する奇妙山として奇妙山と称され、奈良時代に聖武天皇が夢で伊勢皇太神のお告げを受け、東大寺大仏鑄造のために銅が採掘されたと伝えられている。



〔知明湖・一庫ダム〕



妙見山から望む里山



妙見山のリフト



菊炭(池田炭)と原木



能勢頼次公銅像



日蓮上人像と鐘楼



浄水堂と妙見さまの御神水



開運殿本殿



星嶺

上駅付近には、ミネラル分豊富な名水「**妙見の水**」がある。このあたりの黒川地区は、日本の里山景観が維持されている貴重な地域で「日本一の里山」といわれ、照葉樹林(コジイ林)、^{かりよくりん}夏緑林(ブナ林)、里山(クヌギ林)などの広葉樹林や混交樹林が広がり、炭焼きが盛んであった。貝原益軒の大和本草にも「摂津池田炭は、一倉という里にてマクヌギを焼き、池田にて売る」とあり、茶の湯に重用された。一庫ダムの建設により黒川と隣接する国崎地区が水没したので、池田炭は大部分の地域で生産されなくなったが、利休や秀吉が用いたとされる**菊炭**(一庫炭、池田炭とも呼ばれる)が一部で今なお生産されている。

能勢妙見山は、関西随一の日蓮宗霊場(眞如寺の飛び地境内)である。天平勝宝の頃(750年頃)に行基により開かれ、のちに源義仲(清和天皇の孫、経基親王の嫡子)が多田築城の折に城の守護神として妙見菩薩を祀り、その孫、頼国が能勢郷に移住するに当たり、妙見山に移されており、能勢家代々に伝えられた。その後1600(慶長5)年に、23代頼次公が能勢家を再興した折に日蓮宗日乾上人に帰依して(日蓮宗に改宗し)妙見大菩薩として祀られ今日に至っている。参道には**能勢頼次公銅像**や**神馬像**があり、山門をくぐると**日蓮上人像**、**鐘楼**がある。**浄水堂**には**妙見さまの御神水**が湧きでており、「妙」は美しい、「見」は姿、すなわち、「美しい姿」ということから、江戸時代から役者の信仰が篤く、柱には四代目中村歌右衛門の銘があり、歌右衛門の浄水とも呼ばれている。**開運殿**の本殿には開運の守護神である北辰妙見大菩薩が祀られている。また、山門の外側には、星降り伝説を象徴する信徒会館**星嶺**が目进行く。妙見信仰のルーツである「星」と能勢家の

紋章である「矢筈」をモチーフにデザインされたガラス張りのモダンな建物である。

一庫・大路次川が猪名川本流と合流する手前、西畦野に謡曲「仲光」でも知られ、美女丸伝説で有名な小童寺がある。阿弥陀二十五菩薩来迎図は重要文化財である。

少し南下すると、猪名川が90度近く方向を変え、御社橋付近ではやや流れが急な溪流となっている。御社橋を渡った猪名川の左岸側に多田神社があり、この一帯は清和源氏発祥の地として有名である。「多田」の由来は、コラム2を参照されたい。現在の社殿神廟は、徳川4代将軍家綱の再建によるもので、外廊南門に楼門(南大門)、東西に高麗形の大門があり、内廊には、神廟、本殿、拜殿、随神門などがある。境内には唐椿の老木や無患子など県郷土記念物の珍しい樹木が鬱蒼と茂っている。

多田神社の東側の能勢電鉄妙見線沿いには、源満仲公夫人の発願で子の源賢僧都によって建てられた頼光寺があり、別名あじさい寺とよばれ、梅雨時には紫陽花が咲き乱れる。少し南に明治時代、我が国最初の飲料水工場「三ツ矢サイダー」発祥の地である平野鉦泉跡がある。住吉神社は、平安朝の頃、源満仲によって創建された。鉦泉水を薬用に利用したところ大変効能があったことに感謝して、摂津一宮の住吉大社から住吉大明神を勧請したのがこの神社のはじまりとされている。この西側に、平安時代の「延喜式」に記載されている由緒ある多太神社がある。

少し南に能勢電鉄の駅名や町名で知られる鼓ヶ滝があるが、一般にいわゆる落差のある「滝」ではなく、兩岸に断崖が迫り、岩場を流れる急流が下流の銀橋に向かってみられる。近くに、西行法



多田神社前の御社橋と猪名川



多田神社拝殿



多田神社南大門



三ツ矢サイダー発祥地
平野鉦泉跡



無患子



住吉神社



西行法師の歌碑



九頭大明神

師の歌碑があり、『音にきく 鼓が瀧を うちみれば 川邊ニさくや しら百合の花』とうたわれ、鼓ヶ滝にまつわる民話としても知られる。

また、源満仲が九つの首を持つ龍を退治したという伝説から龍の首が祀られている九頭大明神がかなり奥まったところにある。



銀橋から上流を望む

コラム ② 猪名川と多田神社

多田神社は、元多田院とも多田権現社ともいわれ、関西の日光ともいわれる大社である。第56代清和天皇の孫、源経基の長子、源満仲をはじめ頼光、頼信、頼義、義家を祀ってある源氏発祥の地である。多田の由来は、968(康保5)年、大阪住吉大社に参拝した摂津守満仲が神託により放った矢を追ったところ、山に囲まれた大きな沼に大蛇2匹が現れた。頭が九つもある大蛇が頭を射抜かれて息絶え、もう1匹は山の一角を崩して逃げた。水が流れ出た跡に、多くの肥えた田が現れたことから「多田」と名付けられたと伝えられている。

猪名川は、これより上流に多数の支流があり、昔からたびたび氾濫し、地域の人々はその猛威を恐れていたが、満仲が鼓ヶ滝の岩山を切り開くなど治水事業に力をいれ、沼地を開拓して多くの田畑を造ったといわれる。満仲は、また銀銅山の開発(多田銀銅山)など鉦山事業等殖産事業にも力を注ぎ、

国力の増進と源家興隆の基礎を築いたといわれる。満仲以降、頼光の鬼退治、頼信の関東平定、頼義、義家による前九年、後三年の役などにより、古来から武運長久、家運隆昌、厄除開運の守護神として崇敬されている。

頼光「鬼退治の唄」の掲示や曙や貴乃花など歴代横綱の奉納手数入記念植樹もみられる。



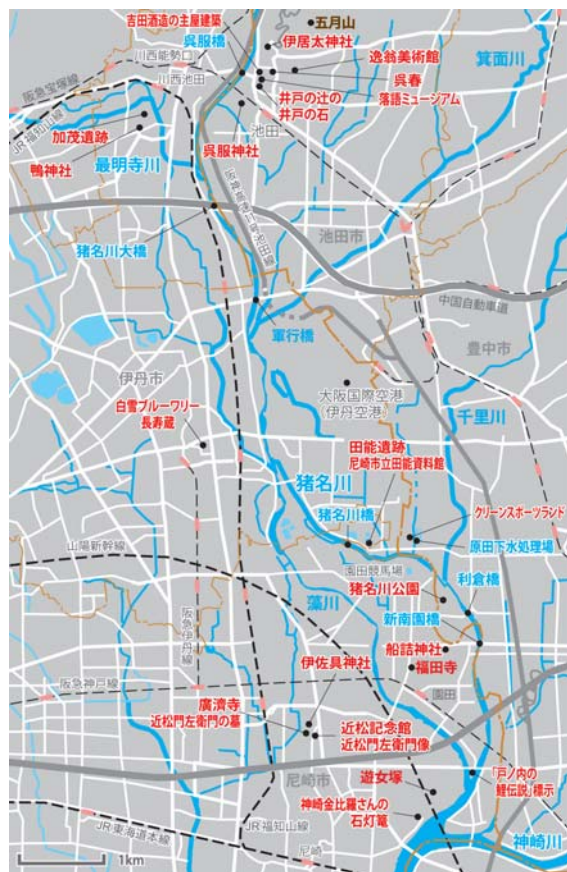
〔源頼光公鬼退治の唄(上)と横綱奉納手数入記念植樹(下)〕

4 猪名川中・下流部

鼓ヶ滝付近より猪名川を下り、**余野川**合流後に阪神高速11号池田線が猪名川を跨ぐところに、日本最大級のコンクリート製の斜長橋がある。景観が美しい**五月山**を背景に、全景が大きなハープのように見えるため、「ビッグハープ」の愛称で呼ばれている。さらに左岸に五月山を見ながら下ると、**呉服橋**に至る。ここから見る猪名川は川幅もあり、ゆったりと流れている。呉服橋は、江戸時代は順礼橋といわれ、西国三十三ヶ所の二十三番札所勝尾寺と二十四

番札所中山寺を結ぶ順礼街道に架かることに由来している。のちに池田の古名、**呉服**^{くれは}**里**^{さと}にちなんで呉服橋と改称され、右岸側橋のたもとには由来が記されている。

阪急宝塚線池田駅のすぐ近くには、**呉服神社**^{くれは}がある。「日本書紀」によると、応神天皇の頃に、阿知使主・都加使主を呉に遣わして縫工女を求め、呉王から呉織・漢織を与えられ、摂津の国武庫に連れて帰ったと記されている。池田では、その後縫女達が猪名の港(唐船が淵)に着き、機織裁縫の技術を伝えたといわれはとり・あ



五月山を背景にビッグハープを望む



呉服橋
由来の標示



呉服神社拝殿



謡曲「呉服」



「井戸の辻」の井戸の石



落語ミュージアム



吉田酒造主屋建築



呉春蔵元

やはとり伝説が伝えられている。

呉織は呉服、漢織は、穴織とも書き、呉織は、呉服神社に、漢織は、**伊居太神社**^{いけだ}に祀られたとされている。また、境内には、謡曲史蹟保存会による謡曲「呉服」と呉服神社についての説明が記されている。

池田は、戦国時代、池田氏の城下町として発展し、街道が交差し猪名川の舟運もある交通の要衝であったので、早くから「物資の集散地」として発展し、伊丹とともに酒造業も栄えた。江戸時代には、能勢街道や勝尾寺と中山寺を結ぶ西国巡礼道と尼崎伊丹道の交差する場所に井戸があり、井戸の辻と呼ばれ、酒蔵や商店が軒を連ねる池田の中心になっていた。井戸の辻跡で発見された井戸の石は、やや西側に設置されている。この北側には、上方落語の名作「池田の猪買い」の舞台にちなんだ上方落語の資料展示館**落語ミュージアム**(名誉館長 桂文枝)があり、池田銀行発祥の地に建てられている。

猪名川の上流の水がよく風化の進んだ丹波古生層を通して池田や伊丹に至っており、この水で造った酒は、京都や奈良の酒よりも辛口の酒を生み出し、人気を博したと伝えられる。元禄期からの造酒屋、**吉田酒造の主屋建築**(国登録有形文化財、明治10年再建)は、近代初期の造酒屋と近世以来の銘醸地池田の繁栄を今日に伝えている。現在、池田には、「**緑一**」(吉田酒造)、「**呉春**」の2軒の酒蔵が残っている。

伊丹の酒では、剣菱や男山、松竹梅などの多くの伊丹発祥の銘柄が灘や北海道などの蔵元に移転あるいは買収されていく中で、「白雪」、「老松」などの銘柄が現在も残っている。呉春の名の由来は、司馬遼太郎の「天明の絵師」の主人公

松村呉春に由来するといわれ、妻を亡くし池田に移り住んだ松村月溪が、呉服の里で春を迎えたことに感銘し、中国風に松村呉春と改名し、後に四条派画家の祖として晩成した。五月山の麓にある**逸翁美術館**には、呉春筆の白梅図屏風六曲一双や与謝蕪村筆の奥之細道画卷などの重要文化財が所蔵されている。



逸翁美術館

猪名川は、これより下流、右岸側で**最明寺川**と合流する。最明寺川の上流、阪急宝塚線の山本駅から北へ約1.5km山手に上り、溪流沿いを行くと大聖不動尊と書かれた門を潜った右手に**最明寺滝**がある。三方を崖に囲まれた高さ10m程の滝があり、滝壺のそばの岩間に不動明王が祀られている。その名前は鎌倉幕府の執権北条時頼(出家して、最明寺入道と呼ばれていた)が行脚の途



最明寺滝

コラム ③ 猪名川伏流水と酒造り(池田酒と伊丹酒)

わが国の酒造りは、中世初めには奈良や京都の寺院を中心として行われ、室町時代の末頃には日本酒の原型となる諸白酒(白米で造った麴と白米を用いて造る酒)が生み出され、「本朝食鑑」によると、和州南都(奈良)の諸白が諸国銘酒中の第一と評されている。江戸時代には、南都諸白の醸造技術を取り入れて技術改良を行った伊丹諸白が銘酒として人気を博した。

伊丹市鴻池には「清酒発祥の地」を示す「鴻池稻荷祠碑」があり、碑文によると、鴻池家初代新六は、戦国武将山中鹿之助の子孫で、1600(慶長5)年、鴻池村において清酒「双白澄酒」を造ることに成功し、これが鴻池家の繁栄の基礎となったとしている。現在、白雪の小西酒造と伊丹老松酒造が残っているが、元禄年間には、伊丹は文化の町として発展し、文化人が足繁く訪れ、小西家と頼山陽、

井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門などの親交が結ばれたと伝えられる。

一方、室町末期から安土桃山時代の頃に満願寺屋により酒造業が始められたといわれる。池田の酒造業は、元禄期に最盛期を迎え、酒造業家数も38軒にのぼったとされる。その後、さらに辛口の酒が好まれるようになり、灘や西宮の酒屋が海辺に近かったことから輸送面でも有利になり、主流になっていった。



〔白雪ブルワリー長寿蔵〕



最明寺川から鴨神社の森を望む



鴨神社



箕面の滝



箕面川ダム



田能遺跡

中に立ち寄り、素晴らしい景観が気に入り庵を築いた事に由来すると云われている。少し戻って、滝を右下に眺めながら登って行くと源氏一門の祈願所とされる**満願寺**がある。奈良時代の神亀年間(724~728年)に創建され、千手観音像・九重の石塔など国・県指定の文化財がある。大江山で酒天童子を退治した、坂田金時の墓があり、本坊の書院庭園が美しい。

JR川西池田の南側に、標高約40mの伊丹台地の北東端部に弥生時代の近畿地方を代表する大規模集落遺跡、**加茂遺跡**があり、**栄根銅鐸**(東京国立博物館蔵)をはじめ多くの土器や石器が出土されている。川西市文化財資料館には、加茂遺跡をはじめとする市内出土品が展示され、栄根銅鐸の複製品が展示されている。その中心地に**鴨神社**があり、平安時代の「延喜式」に記載されている由緒ある神社とされている。祭神は「**別雷命**」が祀られている。

中国自動車道の**猪名川大橋**をくぐると、伊丹市域に入り、川幅がますます広くなり、広い河川敷が続く。**軍行橋**を過ぎて直ぐ**箕面川**が合流する。箕面川の上流には、**明治の森箕面国定公園**があり、見事な紅葉と高さ33mの**箕面の滝**で有名である。箕面の名は木々の間から落下する滝の形が「箕」に似ていることに由来するといわれる。さらに行くと治水用の**箕面川ダム**がある。

軍行橋より下流に南下すると、西側の**藻川**と東側の猪名川の二手に別れる。猪名川橋を渡って左岸の堤防を少し下ると**田能遺跡**がある。弥生時代の集落の跡に平地式住居や竪穴式住居、高床式倉庫などが復元され、**尼崎市立田能資料館**には、銅剣鑄型や土器、石器、碧玉製管玉などの貴重な遺物が展示されている。続いて**クリーン**

スポーツランド、原田下水処理場などの施設がある。対岸の猪名川右岸の堤防からみると、これらの施設の背景に伊丹空港に航空機の着陸する姿を見ることができる。堤防から右岸側を振り返ると園田競馬場の全貌が間近に見える。直ぐ下流に猪名川公園があり、千里川合流後、利倉橋へと続く。



利倉橋から上流を望む

やや下流の新南園橋の西には船詰神社がある。出雲国譲りのとき、天照大御神より差し遣わされた鳥之磐楠船命を祀っており、交通運輸の神として、海、陸、空の安全守護神の元祖と伝えられている。阪急神戸線の園田駅の北には真言宗聖天派山福田寺がある。この寺は奈良時代に生駒山に開かれ、大正時代に暗峠から移された。本尊はインドの古代神話にでてくる歓喜天で、園田聖



船詰神社

コラム 4

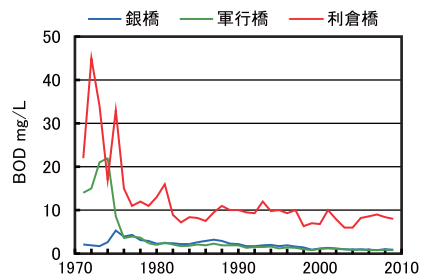
猪名川の水質

猪名川中流部の銀橋、軍行橋および下流部の利倉橋の3地点の水質について、BODの年平均値の経年変化を図に示す。猪名川中流部の水質は、流域の住宅開発等により1970年代前半に悪化した。1980年代に入ってから下水道の普及等により急速に改善された。

有機汚濁指標であるBODでみると、銀橋で5.3mg/L(1975年度)、軍行橋で22mg/L(1974年度)であったが、近年では両地点ともに1.0mg/L以下に低下している。また、アンモニア性窒素濃度(年平均値)についても、それぞれ0.39mg/L、0.37mg/L(1978年度)であったのが、2009年度には両地点ともに、0.01mg/L以下に低下している。

下流部の利倉橋でも、既存の市街地の人口増に伴う生活排水や工場排水などにより、BODが45mg/L(1972年度)と高かったが、近年では8.1mg/L(2009年度)と低下してい

る。アンモニア性窒素濃度については、1984年度に31mg/Lであったが、2009年度には、3.1mg/Lと低下している。この地点については、1970～1980年代に水質の悪化が顕著であったが、下水道施設等の普及により水質が改善されている。今後、アンモニア性窒素の低下が進めばBODのさらなる低下が期待される。



〔猪名川中・下流部3地点のBOD経年変化〕

公共用水域水質等環境データベースより作成



福田寺



伊佐具神社



廣濟寺



近松門左衛門像

天、厄除大師として知られている。

藻川の右岸側、JR塚口駅の東側には、「延喜式」の中の神名帳に記された摂津国河辺郡七座の第一の神社である伊佐具神社がある。この神社の南の廣濟寺には、江戸時代の人形浄瑠璃の脚本家として有名な近松門左衛門の墓があり、東隣の近松公園内に近松記念館や近松門左衛門像がある。

藻川は昭和40年代には汚濁していたが、近年改善傾向にあり、ヒメホタルの観察会やクリーン作戦など様々な環境活動が行われている。

藻川は戸ノ内で猪名川と再び合流する。合流点付近の緑地内に、行基と鯉にまつわる「戸ノ内の鯉伝説」の標示がある。猪名川はこれより少し南下したのち、山陽新幹線と交差するあたりで神崎川に合流する。神崎川との合流地点手前には、「天下第一の歓楽地」の名残として残る遊女塚が梅ヶ枝公園内にある。讃岐の国へ流される途中にこの地に立ち寄った法然上人に、念仏を授けられて、川に身を投げた五人の遊女の亡骸を葬ったものと伝えられている。

神崎川は、淀川と奈良時代の785(延暦4)年に結ばれ、瀬戸内海方面から京に至る船泊が停泊する交通の要衝地「神崎の津」として繁栄した。猪名川最下流の右岸付近の道路際に、江戸時代に航海の安全を祈念して造られた神崎金比羅さんの石灯籠がある。



猪名川と藻川の合流地点



「戸ノ内の鯉伝説」と鯉の標示



神崎金比羅さんの石灯籠